











霞翠小学校の実践の背景は簡明である。以下は教育を考える3原則である。

- 「やったことの無いことは出来ない」
- 「教わっていないことは分からない」
- 「練習していないことは上手には出来ない」

従って、第1に為すべきことは子どもの活動舞台を準備して励ます。第2は分からない事は分かるように説明する。第3は習得の目標を反復練習することである

## (2) 指導の3原則

教育において、あらゆる「指導結果」は「中身と方法」の関数である。したがって、指導の第1原則は「中身と方法」を決定することである。「中身と方法」が間違っていれば、結果は出ない。奇妙な事だが、どの学校の実践発表を聞いても、言っている事も、書いている事も似たり寄ったりである。しかし、成果は全く異なっている。なぜか！？恐らく決定的に違うのは、「書いてある事」の実践方法とその実行の「度合い」である。

それゆえ、指導の第2原則は、「指導」の目標と到達地点を明示して、実践することである。実践方法やその「度合い」が明確でないのは、到達すべき地点を明示できていないからである。どこの学校でも「体験活動」を重視すると言う。どこの学校でも「授業がかなめ」で「あいさつ」が大切と言う。「音読タイム」を設定

し、「チャレンジ・タイム」を準備している。しかし、指導結果は天と地ほども異なるのはなぜか！？学校が言っている事が具体的な実効性を伴わぬ「口だけ！！」のことだからである。

第3の原則は、子どもへの応援と信頼である。教育が定める中身も、方法も、到達地点も、その大部分は子どもの理解を得たものではない。子どもを鍛える為には、時には、厳しい中身、困難な方法に挑戦しなければならない。だから教育の原則は「師弟同行」なのである。子どもに対する最高の応援は先生と一緒にやってくれる事である。最高の信頼は一緒にやってくれる先生からの励ましと評価の言葉である。欠けているのは「師弟同行」である事に現代の学校は気が付いていない。

## (3) 忘れられた「概念」—無視された「体得」

あらゆる「向上」は「学習」と「体得」に起因する。なかんずく、幼少期の「生きる力」は「体得」に起因する。「体得」の概念が久しく忘れられていたことが日本の教育の不幸である。

忘れられた理由は、「体得」が「型」を重んじるからである。「型」を重んじるということは、子どもの関心や主体性を軽んじる事に通じているからである。戦後教育が最も重んじたのは個人の思考であり、子どもの興味・関心である。最も拒否したのはこれらを問わない教育である。「型」の指導は子どもの考えは問わない。興味・関心も時には重視しない。子どもの主体性も一定の枠の中でしか認めない。それゆえ、「体得」は故意に忌避され、意図的に忘れられたのである。しかし、子どもが学ぶべき「価値」は子どもに聞くべき事ではない。「価値」は子どもの存在に「先在」しているのである。何を学ばせるか、何を学ぶべきか

は子どもの生まれる前から決まっているのである。然るに、子どもは「価値」を学び、「型」を学んだ後でその意味を理解するのである。もちろん、「型」の教育には、創造性を抹殺する「型にはまり」、「型通り」に陥る危険が、常に存在することは自覚しておかねばならない。しかし、自分の個性を発現して、ありきたりの「型」を打破する為には、世阿弥が指摘したように、「型より入りて、しかる後に「型より出ずる」しか方法はない。

子どもが学ぶべき言語は「文型」である。子どもが身につけるべき作法・礼儀は「態度と行為の型」である。体力・耐性は「行動の型」を保持する力である。協力や責任は「社会生活の基本型」である。親切な行為は「思いやりの型」である。現代の教育、特に、学校教育は理屈と説教に明け暮れて、「型」の習得については捨てて顧みない。子どもが成長しないのは「型」を体得していないからである。





# 『風をつくった男』

宰相小泉純一郎論

## ■ 1 ■ 政治は論ぜず

「風の便り」は生涯学習通信だから政治は論じない。政治学者でもない筆者には、当然、個々の政策の成否や、適否について論じる能力もない。しかし、政治は個々の政策の総合として、時代や風土をつくる。それゆえ、小泉純一郎がつくり出した政治風土は生涯学習や生涯スポーツの舞台となる。政治は時代の雰囲気や文化を形成する。宰相小泉純一郎が登場して時代はどこを目指そうとしたのか？小泉政治がもたらした変化の「風」は社会や文化をどのように揺らしたのか？それが小論のテーマである。それゆえ、宰相小泉純一郎を論じても、政策の是非や政治姿勢の適否には最小限しか論及しまいと自制している。

日経(2004.12.26)によると採点を問われた識者の6割が小泉内閣の経済政策に「及第点」をつけたという。マスコミは小泉改革を巡って終始批判的であった。理由もいろいろ論じられたが、大半は、既得権や利害の調整に関する事で、結論は終始的外れの些末な政策のあら探しであった。経済政策の反対論者も、経済が上向いた今となつては、さすがに初めの頃のように氣勢は上がらない。公共投資論者も沈黙した。”小泉改革は言葉ばかりで実行が伴わない”などとさも分かった風な解説をして来たメディアも、実行を妨

げたのは、自分達の言動であることを少しずつ悟つたであろう。小泉改革の政治思想と政策の実行度の乖離に批判的であったメディアも世間の支持が続くと自信を無くした。最近は出たがり屋の識者の意見の陰に隠れてものを言う。また、そうした識者も、多くが変節しかつ変説した。小泉改革を酷評した人々も、メディア自身も、かつての自分の意見を忘れたかのようなふりをしている。”卑怯”な振る舞いである。かつて大声で吠えた連中も、自分の意見が間違っていたことが明らかになって、沈黙を守っている。この際、政治家やメディアの沈黙は無責任であり、不作為の罪に当たる。彼らは言論で飯を食っているにも関わらず、遑って自らの主張や学説の誤りを認めない。「人のうわさも75日」を決め込んでいる。”ずる賢い”人々である。声だけが大きくて、反小泉で格好だけをつけた連中は、さすがにメディアからも見放されて、テレビには登場しなくなった。こうした連中と同じ次元で宰相小泉純一郎を論じるつもりは毛頭無い。以下は問わず語りにかつての教え子達に解説した我が宰相論である。

## ■ 2 ■ 『風をつくった男』

宰相小泉純一郎を一言で形容すれば、『風をつくった男』である。アルビン・トフラーの「第3の波」を意識すれば、時代の「波をつくった男」と呼んでもいいが、日本語は「風土」といい、「家風」といい、「風習」といい、「風流」といい、小誌も「風の便り」と「風」を名乗っているのだから、この際「波」よりは「風」がふさわしい。テレビ時代の政治家は役者も、演出家も、指揮者も兼ねなければならない。政治家でありながら宰相小泉純一郎は、あたかも役者や思想家やオーケストラの指揮者のごとく時代のシナリオを執筆・演出し、自ら主演し、時代の音楽を奏でた日本で最初の政治家だった。彼は、時代の方向を指し示し、これまでの日本文化とシステムをひっくり返して、人々の気分を一新した。「風を作る」とは、社会の雰囲気醸成を醸し出すことである。ひっくり返したのは既得権益にしがみつく固陋なシステムである。打ち壊したのは日本を世界から孤立させる因習と伝統であった。結果的に、日本人の気分が一新したのである。新しいシステムが始動し、新しい試みが試されるようになった。そうした気分の中から、しきたりに囚われない「特区」構想が登場した。また、日本人でありながら日本の枠に囚われない新しい日本人が生まれたのである。世界で勝負しようとするイチローがその突出したサンプルである。

今は未だ、開拓者はスポーツや優れた企業の技術分野に限られている。しかし、現在のあらゆる既得権益の壁を打ち壊せば、数多くの分野に新しいイチローがうまれるであろう。

生み出すのは時代の風である。その「風」をつくったのがほかならぬ宰相自身であった。小泉純一郎の政治家としての最たる才能こそ「風」を生む力であった。浅薄な批判者は宰相の「パフォーマンス」と評するが、「風」を生む為には「パフォーマンス」の持続こそが重要なのである。彼は政治という舞台で一流の演技を続けているのである。彼の「パフォーマンス」は常にメディアを賑わせ、やがて時代の風になる。政治が生み出した「風」は報道のくり返しが支え、やがては浸透して、教育やメディアの「風」の方向を定める。教育が新しい「風」を理解し、本腰を入れて、

人々に説くようになれば、そこから更に新しい「風」が生み出される。人々の生涯学習を支えているのも、生涯スポーツに人々が勤しむのも、すべて時代の「風」の為せる業である。そして、それらの「風」がエネルギー源となって次の「風」を生み出すという循環は、生涯学習や生涯スポーツの為せる業なのである。

しかし、小泉内閣の文部科学大臣はすべてミスキャストであった。小泉自身が文部大臣を兼務して、教育システムの閉鎖された壁を破壊し、殻にこもった大学を打ち壊し、教員の免許制度や終身雇用制を流動化させれば、世界に通用する研究者も、芸術家も生まれるであろう。結果的に、日本人の中に世界の中で生きようとする「風」が生まれ、日本自身が世界の日本になって行くだろう。「風を起こした」宰相は日本人の敵が日本人であることを最も痛烈に知っていた人であった。だからこそ彼は頑固に方針を変えない。総理大臣が言い続け、演じ続ければ、「風」が起る。頑固に「風」にこだわるのである。「風」をもって日本人の変革、時代の変革を成し遂げようとしたのである。彼は、時代を変える「風」の重要性を一番自覚していた。しかしながら、最後に風を支える根源が教育にあるという事実認識においては不覚であった。システムを変える為には日本人を変えざるを得ない。文化を変える為にも日本人を変革するしかない。もちろん、日本人を変革する為には教育以外に方法はない。経済の構造改革が急務であったことは分かるが、それを成し遂げる為にも教育の「抵抗勢力」を粉砕することが最も重要であった。「抵抗勢力」の大部分は現行の教育システムの産物である。従って、そこを改革しない限り、ふたたびまた、旧態依然たる「抵抗勢力」を生みだしていく。教育の「抵抗勢力」を温存すれば、次の「抵抗勢力」を生み出す。小泉改革には、教育の「抵抗勢力」が生み出す悪循環の実態診断が不十分であった。それゆえ、小泉改革の時代精神を理解しない文部大臣の任命が最大の失敗であった。ミスキャストであるとはそういう意味である。小泉特区構想において最も消極的であり、最も想像力に欠けていたのも教育界であった。大臣の顔ぶれを見れば、新聞の

報道は当然の結果であった。

### ■ 3 ■ 「改革」と「再生」

総理大臣は「改革なくして成長なし」を馬鹿の一つ覚えのようにくり返した。短いフレーズのくり返しが小泉政治の真髄である。新聞を通して、テレビを通して、このスローガンは小泉政治を象徴した。時代は「改革」と「再生」のスローガンに彩られ、国民はこの二つの言葉の響きに慣れた。それが宰相小泉純一郎が生み出した最強の「風」である。「改革」も、「再生」も現状の否定から始まる。両者共に、現在の自己の否定である。現状に問題がなければ「改革」の必要はない。地域も、企業も潰れていないのなら、「再生」の必要はない。小泉政治の出発は現状では「ダメだ！」と言うメッセージで始まる。「改革」の2文字はいたる所に登場する。いわく、行政改革、経済改革、教育改革、年金改革、司法改革、特殊法人改革、規制改革、そしてすべてをひっくるめた構造改革という具合である。改革の風はあらゆる政策に多用された。公約書のマニフェストは「小泉改革宣言」と命名されたのである。一方の「再

生」は「日本再生」に始まる。日本自体が沈没していることを国民に知らしめたのである。「日本再生」を構成しているものは、「地域の再生」であり、「都市の再生」であり、「環境の再生」であり、「経済の再生」であり、「教育の再生」であった。個々のスローガンの背景には個別の政策が掲げられた。それらの結果が成功であったか、否かは専門家の診断に任せるとして、少なくとも「再生」の必要に付いて国民に認知させたという点では成功であった。要は、現在の日本も、個々の地域も、個別の都市も、環境も、教育も、経済もダメだと認知した。小泉政治の診断は国民の間に深く浸透したのである。人々が理解すれば、そこから当然、再生方法の模索が始まる。いろいろと個別の批判はあっても、内閣が今日まで人々の支持を大きく失っていないのは、国民の多くが改革と再生の必要を認めているからである。

### ■ 4 ■ 初めての「自己責任」

「改革」も、「再生」も時代の「風」は「自己責任」の方向に向かって吹いた。政治が政治課題として「自己責任」を説いたことは初めてのことだったのであろう。それゆえ、人事も自己流、政策も自分流を貫こうとした。従来のしきたりを破って、政策は宰相を中心とした内閣主導で、しかも官邸主導であった。党は当然不満を漏らしたが、「自己責任論者」は異に介せず、政策説明も独特であった。「独裁者」という宰相に対する批判が批判者の「無責任」ぶりを浮き彫りにしている。彼は頑固に自己責任を唱えているに過ぎない。党が選んだ総裁のやることに気が入らなければ「総裁を変えればよい」とは、小泉「自己責任論」の”啖呵”である。

結果的に、小泉政治は一貫して国民に自己責任の倫理を教えようとした。小泉政治が叫び続けている「官から民へ」のスローガンも、「国が

ら地方へ」のキャッチフレーズも、「痛みに耐えて」のお願いも、「国際国家」の目標も、目指している所は「民」の「自己責任」であり、「地方」の「自己責任」である。国民の自己責任論も、企業の自己責任論も、国家の自己責任論も新鮮であった。自己責任を取ることに無かった日本人に自己責任を説くことの危険は小泉本人が一番分かっていたであろう。これまでの政治は自己責任を取ったことはない。無論、行政は無責任の最たる例である。国民は時に忘れたふりをするが、個人も行政依存であり、社会や政治に責任を転化して来たのは周知のところである。権力者に頼んで、裏口入学したのも、裏口就職したのも、裏口受注をしたのも、その他諸々の便宜を図ってもらったのも無責任である。たかりと依存の構造は今でも続いている。それゆえ、小泉改革の自己責任論に反対論は多い。批判も厳しい。抵

抗勢力も大きい。これまで制度に依存して来た人々の不平や不安は大きい。当然、人々は既得権を離そうとはしない。しかし、既得権益を認める限り、あらゆる改革、あらゆる再生策は機能しない。だから宰相は頑固に自説を曲げない。小泉は、飽くこと無く、行政依存を戒め、制度依存体質を改め、国への依存を批判し、世界に甘えることを止めようと呼び掛け、役人や特殊法人の現行制度への寄生は許さないと広言した。それが「ワン・フレーズ」宰相との批判も買った。しかし、批判者の方が浅薄であることは自明である。「ワン・フレーズ」だからこそ政治に関心のない国民も理解したのである。「風」は宰相がくり返し一つのフレーズにこだわったが故に起きたのである。その意味で、小泉政治は政策の実行と併せて国民の教育を果たしたのである。時代の風の方向を定めているのである。

個々の政策の成否は別として、「三位一体改革」が狙ったのが地方の自己責任であり、「特区構想」が目指したのが、関係者の工夫と自己責任である。特殊法人改革も同様であり、イラクへの自衛隊派遣も同じ精神の発現であった。中でも経済の自己責任論は最大の頻度、最大の音量をもって語られた。かくして銀行や郵便局の「ペイオフ」が導入される。郵政の民営化は、更なる民の自立と責任を促すものである。医療保険や年金の自己負担も増加した。外国から作ってもらった憲法も改正しようと検討が始まり、同じように教育基本法も新しい視点から見直そうということになっている。その適否は別として、小泉政治の

すべての政策発想は「自己責任」論に収斂するのである。

もちろん、いまでも日本人は無責任である。行政への依存も甚だしい。日本の地方も無責任であり、日本の企業も無責任を続けるであろう。それゆえ、地方分権が始まれば地方議会は、たちまちその無能ぶりを露呈するであろう。観察する限り地方議員の質は悪い。選挙民の意識も低い。どんな形であれ、中央の金が地方に移されれば、これまでの慣習とときたりに従って、汚職やたかりが頻発するであろう。しかるべき監視システムが機能しない限り、企業の産地偽装も、品質偽装も続くであろう。偽装は我が国の伝統である。悪徳商法も絶えること無く続き、騙された消費者は行政が何もしてくれないとピーピー悲鳴をあげるだろう。自己責任論とは裏腹に、個人の生活においては、カード破綻者も、生活保護世帯も、ニートも、フリーターも、不登校も、非行も、引きこもりも増大するであろう。これらは責任を取れない家族が発生させた不幸である。自己責任能力を身につけ損なった個人が陥った悲劇である。

不幸も、悲劇も一朝一夕にはなくなるが、それにもかかわらず、「改革」や「再生」と同じように、「自己責任」という言葉は社会に定着したのである。日本にこれらの「風」を起こしたこと、それが小泉政治の真髓である。

## ■ 5 ■ 手法としての「選択と集中」

各省庁の役人が作文した政策は従来通り縦割り分業の壁は破れず、総合化の視点もなく陳腐なものである。小泉政治といえどもすべての領域に通じているわけではない。子育て支援や教育政策にほとんど見るべきものがないのはその証拠であろう。しかし、時代の「風」をつくる点においては「選択と集中」の手法を徹底してお見事であった。その一つが道路公団に象徴された特殊法人改革であった。改革は抵抗勢力との取り引きであるからいつも結果は中途半端である。

それゆえ、実際の改革が中途半端に終わっていることを批判する人が多いが、それは改革をやってみたことがない人々の無知に起因する。どんな改革も白紙の上に絵を書くようには行かない。既得権にしがみついた人々の強烈な抵抗がある。しかるに、どのような改革も結果は妥協の産物である。どんな改革も60点で満点である。小泉改革が徹底しなかったのは、改革の失敗ではない。中途半端に終わらざるを得ない改革の本質が現れただけである。これまでそういうことが

国民に十分伝わらなかったのは、これまでの政治が改革の名に値することをほとんどやって来なかったからに過ぎない。しかし、小泉政治の「選択と集中」のお陰で、「改革」は常識となり、今や国民は「特殊法人」が古い制度の悪の象徴であることを理解している。中央省庁がこれまでの既得権にあぐらをかいて総論賛成、各論反対の面従腹背を貫いていることも理解した。選択したのは「不良債権処理」である。集中したのは「道路公団」改革であり、「郵政民営化」であり、地方分権のための「三位一体改革」であった。これらは旧体制の無駄や不合理や反時代性、反国民性の象徴として選択されたのである。やむをえずマスコミも小泉政治の「選択と集中」を追い掛けるしかなかった。それゆえ、ニュースはくり返し報道され、解説は詳しく掘り下げられ、多くの国民がすくなくとも当面の政治課題が何であるか、については認識した。選挙の際の総理の街頭演説には女学生までが集合した。あの退屈極まりない国会中継も、宰相小泉純一郎が登場して以来実に多くの人が見るようになった。ホームページにも多くの人々がアクセスしている。政策の実現とは別に小泉政治は偉大な教育事業でもあったのである。良きにつけ、悪しきにつけ、支持するにせよ、反対するにせよ、小泉政治ほど国民が政治を論じた時代はなかったであろう。それは少数の政治メッセージを選択し、集中的に論じ、実行を試みた成果である。政策によって具体的なものも変わったが、何よりも時代の風が変わり、時代の方向が定まったのである。もはや日本社会に「改革」が不要だという人はいなくなった。もはや各種の「再生」の必要を否定する人はいなくなった。従来のシステムを改革し、さまざまな分野の「再生」が必要であると考え人が断然増えた。「自己責任」は子どもでも使う用語になった。そこかしこで人々は相変わらず無

責任ではあるが、少しずつ日本に自信を持ち始めている。世界の舞台で活躍する人々に自分を重ね始めている。そのため、メジャーリーグの日本人選手の活躍も、サッカーの国際試合も世界の中の日本と重ねて観戦する。世界のさまざまな分野で活躍する日本人ヒーローやヒロインのインタビューも花盛りであるが、これこそ小泉政治が敷いた国際国家日本のイメージである。小泉政治が展望する「日本ブランド」の定着はまだであるが、時代はその方向に動こうとしている。教育界が何十年もかかって出来なかったことを小泉政治はわずか4年で果たした。後世の歴史家がどのような尺度で小泉政治を評価するかは知らない。しかし、筆者に分かっていることは彼が時代の『風を作った男』である、という点である。

演歌風に歌えば小泉改革は次のようになる。

改革の風が吹く  
再生の歌が聞こえる  
改革なくして成長なし  
ワン・フレーズをくり返し  
パフォーマンスをくり返す  
政策は限定  
集中と選択である  
民にできるものは民へ  
地方にできるものは地方に  
人生いろいろ  
改革いろいろ  
痛みに耐えてがんばって  
自己責任でやりぬいて  
抵抗勢力も友だという  
昨日の友も今日の敵  
着実に日本は変わっている

### 「風の便り」2004年号の登録について(最終回)

1月になりました。1年区切りの購読更新の季節になりました。

「風の便り」も60号となり、次号から6年目のサイクルにはいります。一年間のご支援ありがとうございました。多くの方々のご支援のおかげで、来年も購読料は無料で続ける事ができます。購読をご希望の方は90円切手12枚を同封の上事務局までお送り下さい。今回はメッセージカードを同封しません。送付先の変更、ご意見、感想などは前回同封のものをお使い下さい。すでにお知らせしているとおり、アメリカの藤本 徹さんのお力添えで定例のフォーラム「参加論文」と「風の便り」を共にオンライン化しております。合せて御利用下さい。

# MESSAGE TO AND FROM

メッセージをありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがありましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

## ★ 福岡県春日市 田中久記様

お元気にお過ごしのことと存じます。6年前お目にかかった時に論じた高齢者の「活動理論」を京都郡豊津町の「寺子屋」事業で実践しています。田中さんが苦労された「ボランティアただ論」の修正もしました。来年の4月からは保育と教育を統合した事業を開始します。前に聞いていただいた男女共同参画と子育て支援の総合化も出来そうです。5月の中・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会で発表します。その時再会しましょう。楽しみにしております。

## ★ 京都府亀岡市 山下ひろ子様

今回巻岐の実践の総括を書きました。学校は最後の発表会を3月に企画しました。玄界灘をご覧になったことがありますか？巻岐には「原の辻」という吉野ヶ里を超えと言われる古代の遺跡が出土しました。私の信じる「多元王朝国家」論を証明する一つの証拠だと考えています。遠いところですが、巻岐のプログラムが出来ましたらご案内を差し上げたいと思います。茶道を通して子ども達の礼儀が出来上ったらその状況を教えて下さい。

## ★ 佐賀県神埼町 宮地 茂様

沢山の切手をありがとうございました。佐賀の大会ではお目にかかれなくて残念でした。年度末になって文科省補助事業の総括の研修会が各地でめじろ押しですが、事業内容・方法共に子どものためにも、女性のためにも、そして地域の活力のためにもほとんど役立っていないことに気がきます。福岡県の子どもの広場事業も似たような状況です。大本の担当者の想像力の不足、不勉強が目に残ります。財源の乏しい時代に誠にもったいないことです。お力をお貸し下さい。

## ★ 福岡市 小久井明京美様

いつぞや「子ども会」の再生に付いての宿題をい

ただきましたが、ようやく新しい「出口」を見つけようとしています。地域の子ども会がその活動基盤を失うのは時間の問題です。だからこそ「子育て支援」や「次世代育成」の計画が国家事業として登場したのです。新しい子ども組織の条件は、第1に、「縦の集団」であること、第2に、季節季節の「活動プログラム」が豊富なこと、第3に、常時、指導者がいること、第4に、子どもの変容を保護者が支持していること、第5に、多忙な現代の保護者も時には子どもと一緒に活動できる親子同行の機会があることです。来年の5月を過ぎたら「豊津寺子屋」までお出かけ下さい。

## ★ 熊本県人吉市 桑原広治様

忘れていた記事に付いての感想を伺い、改めて教育実践の方法原理に思いを致しました。問題の根源は「授業」という小さな森しか見ない「指導主事」の思い込みであり、多くの大学の付属小学校の実践にあります。今年1年、1年から6年までの寄せ集めの縦集団の生活指導に立ち会いました。学校現場ではないので「指導案」も、指導の形式もすべて無視しました。指導の基本は「礼儀」と「規律」に置きました。保護者には説明会を行って寺子屋の指導方針を提示し、目に余るルール違反者は厳しく罰し、最終的には除名することの「同意書」を取りました。従って、保護者も緊張しています。目標は次のとおりです。

- (1) 「体力」のある子どもを育てたい
- (2) 「がまん強い」子どもを育てたい
- (3) 約束を守り、決まりを守る子どもに育てたい
- (4) 「思いやり」と「協力する態度」を育てたい
- (5) 「発表力」、「表現力」を伸ばしたい

また、子ども達には次のような「豊津寺子屋4か条の心得」を毎日朗唱させます。

- 一つ 何ごととも前向きに、力を尽くそう。
- 一つ 何ごとにも仲良く、みんなを助け合おう。
- 一つ ルールに従い、指導者を敬おう。
- 一つ 熱意は熱意に出会う。一生懸命は一生懸命に

出会う。

この二つで子どもも幼いなりに現場の緊張感を理解します。活動の趣旨や方向も感得します。子どもが状況を理解した後は、素人の「有志指導者」でもあまり混乱なく活動の指導が出来ます。長崎の学校での実践については今回の巻頭小論をご覧ください。細かい指導が大事なのではないのです。はみだすことの出来ない「枠」を子ども自身が理解することが大事なのだと思います。3月に彦岐までお出かけになりませんか？

### ★ 島根県雲南市 和田 明様

お便り感じ入って拝見いたしました。雲南は数少ない合併の成功例になることでしょう。ご指導の NPO 法人のご成功を祈ります。教育界では OECD のテスト結果が出て、学力問題が全面にでましたね。仲間の教育長が「1ポイントアップ」運動を開始しました。問題は学力に限らず、行動規範の体得でも同じことなのですが、現代の子どもには、学ぶための基本条件

が整っていないことにあります。学校は「総合的学習」の時間をすべて「体力と耐性」の向上に焦点化すべきだと思います。同和教育の関係で特別に配置されたいわゆる「加配教員」は勤務時間フレックスタイム制を導入して、学校時間外の子どもの活動指導を学校施設を活用して行うべきです。それができれば、今私がかかわっている「寺子屋」事業が真の意味で「学・社連携」の事業に成り得るのだと思います。「寺子屋」の活動をご覧になった校長先生が、放課後や休暇中の子どもの体験活動が保障されていれば、学校に「総合的学習」は不要ですね、と感想を述べられました。その通りなのです。5月の生涯学習交流会での再会を楽しみにしております。お世話役の人選のご配慮ありがとうございました。

### 過分の郵送料をありがとうございました。

福岡県豊津町 平田敏子様	福岡県田川市 満倉ひとみ様	福岡県星野村 森松 稔様
長崎県長崎市 藤本勝市様	長崎県野母崎町 本村伸幸様	北九州市 古川雅子様
福岡県前原市 小迫田幸子様	島根県平田市 浜田満明様	熊本県植木町 上田博司様
大分県安心院町教育委員会様	島根県雲南市 和田 明様	長崎県西有家町 嶋田惣二郎様
熊本県人吉市 桑原広治様	埼玉県越谷市 小河原政子様	島根県仁多町 藤原陽子様
福岡市 小久井明京美様	大分県日出町 吉良正英様	山口県油谷町 藤田千勢様
山口県田布施町 三瓶晴美様	熊本県熊本市 林田興文様	福岡県宗像市 大島まな様
福岡市 中嶋正信様	福岡市 菊川律子様	山口県宇部市 上田展弘様
福岡県宗像市 岡寄八重子様	福岡県庄内町 正平辰男様	大分県中津市 野中尊立様
福岡県古賀市 廣津美重子様	千葉県印西市 鈴木和江様	佐賀県神埼町 宮地 茂様
福岡県立花町 中村富治様	島根県益田市 西島健夫様	福岡県宗像市 山口恒子様
佐賀県千代田町 堤 安信様	福岡県八女市 杉山信行様	京都府亀岡市 山下ひろ子様
熊本県本渡市 富崎剛章様	福岡県春日市 田中久記様	福岡県穂波町 川原田寿史様
福岡県筑後市 江里口 充様	長崎県佐世保市 西野寿弥様	福岡県 大石正人様

## 編集後記 平成の団欒

わが宗像に筆者待望の”ごはん屋”が登場した。藤沢周平の市井ものや平岩弓枝の「御宿かわせみ」に登場する江戸の”一ぜんめし屋”の平成版であろうと想像している。店は台所がオープンで調理の状況がお客から見渡せる。酒は出さない。それゆえ、長々と喋る人々は来ない。純粹に(?)めしだけを食いに来る。それも「はれ」の日の食事ではない。普段着で来る普段の家庭の延長の食事である。

差し向いに座るテーブル席と、衝立で仕切られたカウンター席が半々である。独り者の客は横に並んで飯を食う。おかずは当然家庭料理の一品もので構成している。客は自分の好みで自由に組み合わせる。卵焼きから始まって、焼き魚、煮魚、野菜の煮もの、揚げ物、ほんの数品の刺身、じゃこおろし、おひたし、納豆に生卵に、数種類の漬け物と酢の物、軽い麺類、ごはんも大・中・小の選択がある。味噌汁は「ふつう」と「ぶた汁」のふたつである。値段もかつての”一ぜんめし屋”がそうであったであろうように他の食べ物屋に比べれば格段に安い。われわれ夫婦は歳を取って小食になったせいもあるが、二人で1,000円に納まる時が多い。風の冷たい、黒雲の低くたれこめた夕暮れには、どちらからともなく言い出して”ごはん屋”へ行こう、ということになる。行ってみるとさまざま「群れ」に出会う。昼時であれば独り者や勤人の「早飯屋」なのであろうが、夕暮れ時は家族や質素な恋人たちや孤独な老人が多い。家族の多くは子ども連れであり、年寄り連れである。「部活」のこと、「塾」のこと、「試験」のこと、「友だち」のことなどが聞こえてくる。冬枯れの”ごはん屋”の風景は、まさに「平成の団欒」を見る思いである。

時代は家庭の機能の多くを「外部化」した。分業はますます細分化し、まだ家庭に残っている生活機能を探す方が難しいくらいである。現代の家族における委託の筆頭は教育であろう。次は衣食住か。繕い物も、家屋の修繕も、衣服のクリーニングも、家の掃除も、レクリエーションも、食事も、年寄りの介護も、幼少期の養育も外部化の対象になっていないものはない。ささやかな食卓を囲んで家族や恋人達が密やかな会話を楽しんでいるのを見ると、”ごはん屋”は団欒の風景をさえ「外部化」したのではないかと錯覚する。普段はそれぞれに忙しく、すれ違いに暮らしている家族や恋人がようやく”ごはん屋”で揃うのが平成の団欒である。一人暮らしなのであろうか、それとも家族が出払っているのか、たった一人で食事をしている高齢者や男性の勤め人は、電線に並んだ寒すずめのようにカウンター風の長いテーブルで、黙々と食べる。誰一人言葉は発しない。さんざめく団欒のかたわらにあっては、”孤食”も、孤立も、孤独も際立つ。”歳を取ってもああいう飯は食いたくないもんだ”、と思わず感想を述べたが、現代の老人は好むと好まざるに関わらず、いつかは”ごはん屋”で孤独な飯を食うようになるだろう。

万々がー、妻に先立たれて生き残った場合には、せめて老いたガールフレンドを得て一緒に来られるよう、趣味の活動にも、ボランティアにも精を出さなければならない。”がんばれよ!”と妻に茶化された年の瀬、夕暮れの”ごはん屋”であった。